Osaka University Knowledge Archive

Title	ワークショップへの感想文⑦
Author(s)	
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2022, 4, p. 125-125
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86373
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

特集３　「〈応用〉することの倫理――緊縛シンポ、ブルーフィルム、ジェンダー」

ワークショップへの感想文⑦

匿名希望

「当事者性」については各々の観点に基づき「表明」されており、なかでも当事者性から出てくる「加害」が指摘されたことで極めて緊張感のある展開となっていました。ただ、参加者（たち）が（発言者だけではなくオーディエンスも）どの程度共有できたのかは不明です。ともすれば「告発」とそれに対する「謝罪」に集約されてしまっている印象が拭いきれませんでした。もし多くの人がそのような印象を受けたのだとすれば、WS としては少しばかりミスリードではなかったかとも思います。そうならざるをえなかったのかどうか、今後検証が必要でしょう。

今回の WS は、「あなた」の当事者性と「私」の当事者性の相違を主題化し、その相違を描き出す行為の遂行としては成功していたとは思います。が、おそらくはそれは結果論として「当事者」足りえたギャラリーの人々にとって共有しえた出来事であり、その一方で、なかなか共有することが難しい者たちにとっては、一人ひとりの発言によって何かしらの「我有化」を求められてしまっていることも――なんとも言えない違和感や疎外感を感じてしまう――あったかもしれません。当事者性と共有化。意図的であれ結果的であれ、それが顕在化されたのであれば WS の目的は達成されたとも言えます。

そのなか吉川さんのご発表にもあった「当事者の生の汲み尽くせなさ」の指摘は、当事者性を「俯瞰的」にみるという問題を提供していたように思えます。当事者と俯瞰者。この矛盾する立場からの指摘である「問題や課題の多様性・重層性、現実の見えにくさ、アクセスの難しさ、研究者と当事者の生のコンテキストの差異」という事実は、今回の WS そのものについて言えるものです。その一方で奥田さんは哲学と倫理学を峻別しながら学問を志向する姿勢を述べられていましたが、この「強くて狭い」当事者性の意識からは、吉川さんの提題にどの程度応えることができるのか聞きたいとも思いました。つまりは、当事者性を水平化しあたかも無化できるのか、それとも否応なしに絡めとられてしまう自己を意識しながらも、そのバイアス性から自らを主張しうるのか。議論されるべきことは、「当事者の生の汲み尽くせなさ」（吉川）と「当事者的当事性と非当事者的当事性」(奥田)という極めて簡便な整理方法の対称図式から何が議論されることになるのかということだったと思いますが、議論されなかったのは残念でした。

（とくめいきぼう）